The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	戦間・戦時期日本におけるアイルランド文学の受容とナショナリズム : 農民文学運動とW. B. イェイツ表象の変容
Author(s)	鈴木, 暁世
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2020, 54, p. 33-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91393
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

戦間・戦時期日本におけるアイルランド文学の受容とナショナリズム

──農民文学運動とW. B. イェイツ表象の変容──

鈴木　暁世

キーワード：農村劇／国家総動員体制／国策文学／プロパガンダ／英学史

はじめに

本稿は、一九二〇年代後半から一九四〇年代初めの日本におけるアイルランド文学の受容の様相とナショナリズムの関連について、特にアイルランドの作家 W. B. イェイツ（一八六五－一九三九）をめぐる言説の分析を通して考察することを目的としている。イェイツは明治以降の日本において広く読まれ、彼が一九三九年一月二八日に死去すると、作家、研究者らによる追悼文を含む多くの文章が書かれた。その中には中村星湖「イエーツは死せず」（『山梨日日新聞』一九三九年三月一九日、二六日）のような国家総動員体制下における文学を通した国策への協力、つまり「文学動員」の文脈で発表されたと捉えられる文章も含まれている。

論に入る前に、W. H. オーデンによるイェイツへの追悼詩 ‘In Memory of Y. B. Yeats’ から第四聯を引用したい。

Now he is scattered among a hundred cities
And wholly given over to unfamiliar affections,
To find his happiness in another kind of wood
And be punished under a foreign code of conscience.

The words of a dead man
Are modified in the guts of the living.[1)]

「哀悼の言葉とともに詩人の死は彼の詩から隔てられ（By mourning tongues / The death of the poet was kept from his poems）」、「いまや彼は百もの都市に散らばり」、「見知らぬ愛情にすっかり委ねられ」、「異国の良心のコードのもと手荒に扱われる」。そして、「死者の言葉は生者たちの臓腑のなかで変容する」。オーデンは、イェイツの死によって、死んだ詩人と彼の言葉が、異なる背景を持つ生きた他者たちの中で様々に好きなように愛され、読み変えられることで、変容していく様を描き出している。デイヴィッド・ダムロシュは、「世界文学」とは「発祥文化を越えて流通する文学作品をすべて内包」し、「把握しがたい無数の正典のことではなく流通や読みのモードだ」[2)]と述べている。[3)] 近代日本においても、イェイツの作品は彼の生前にも既に芥川龍之介、菊池寛、西條八十、伊藤整ら作家たちや研究者をはじめとして広く読まれ受容されていた。本稿では、戦間・戦時期日本においては、イェイツがどのように読まれ、受容側のコンテクストによって変容を蒙ったのか、さらにその様相は受容側の政治的、社会的、国際的な状況とどのような関係があるのかを明らかにしたい。

本稿の問題意識に関する先行研究を確認する。早稲田大学・日本イェイツ協会編『イェイツと日本』は日本におけるイェイツ受容を考える上での基礎文献であるが、一九三〇年代から四〇年代におけるイェイツ受容についての調査は手薄であり、特に農民文学運動や農民劇、国民演劇という観点からの受容に関しては検討されていない。[4)] 鈴木弘は明治期以降のイェイツと日本の交流について詳説しているが、一九三〇年代の事例としては、一九三九年における伊藤道郎らによるイェイツ「鷹の井戸」（松村みね子訳）の上演を紹介するのみで、戦後の事例紹介に移っている。[5)] 山田朋美は一九一〇年代から一九四〇年代の日本におけるアイルランド認識が、アイルランド情勢の変化よりも国際関係における日本の立場の変化や日本国内の政治的状況の変化の

方針の変化と連動していると指摘しているが、「一九三〇年以降は日本が英米とも敵対関係に陥ったことで英文学は敵視され、アイルランド文学に対する関心も急速に低下した」と述べるにとどまっている。[6)]

このように本稿が問題にしようとしている、日本における戦間期からアジア・太平洋戦争期におけるアイルランド文学の受容、なかでも、文化政策とイェイツ受容の関わりや農民文学運動におけるアイルランド劇の受容の様相とその変容に関しては、追究されるべき課題として残されている。特に、日本近代におけるアイルランド文学の受容に関しては、英米文学の一部として見なされる一方で、太平洋戦争中には英米文学とは異なる反英的性格を持つ文学として受容されたという特異な様相が見られる点については検討すべき課題として残されている。

このような課題に関して、一九三〇年代から四〇年代における英米文学者達の仕事や英米文学の翻訳・紹介の動向及びその特徴については、『日本の英学一〇〇年　昭和編』、[7)] 川澄哲夫編『資料日本英学史 2　英語教育論争史』が英語英文学者達の活動を概観しており、[8)] 宮崎芳三が中野好夫、福原麟太郎、壽岳文章らの仕事を分析して太平洋戦争中の英文学者について個々の事例を検討している。[9)] 太平洋戦争中の英米文学者や翻訳者らは、その思想的立場の表明に関して厳しい立場に追い込まれていく。日本において英米の書物を翻訳することについては、敵国の思想や情報を紹介し研究するという役割を果しただけではなく、[10)] 齋藤一が指摘するように「西洋人が西洋人のために書いた西洋文明批判を日本で翻訳紹介」するという行為が、西洋が「日本によって超克されなければならないことを暗示するプロパガンダ」の有効な手段としての役割を果たしていた点も見逃せない。[11)] ただ、これらの先行研究においてはアメリカ、イギリスに関する書物についての分析を中心としており、アイルランド文学のような「英語文学」の日本における認識のあり方の特殊性やその時代的変容については、より仔細な検討を行う必要がある。

本稿では、関東大震災後から国家総動員体制下において、どのようにアイルランド文学ならびにイェイツの表象が流通／生産／利用され、その過程で

変容したのかということとその要因を明らかにしたい。それによって、日本において従来論じられてきた英米文学受容の様相とは異なるアイルランド文学の受容の特異性を明らかに出来るだろう。これらの言説を分析することは、日本近代における文学と政治、社会との関わり、翻訳や研究行為の政治性、戦時中の文学とナショナリズムの関係を問いかけることにつながる。さらに、運動体として組織化される際に文学に何が起こるのかを考察する一事例となると同時に、文化政策と海外文学の受容の抜き差しならぬ関係について再考することにもなるだろう。

1. 日本の農民文学運動におけるアイルランド劇の摂取

昭和初期の日本において、イェイツやJ. M. シングらのアイルランド劇運動は「中央」に対する「地方」「郷土」における文学運動の先行例として参照されるという特徴が指摘できる。[12] 例えば、小林多喜二は一九二七年十月二四日付の小林三吾宛書簡において、以下のように書いている。

> 北海道の劇運動のエポックをつくるのに、東京のものとか、外国のものとかの借物でやるのをまだ聞いたことはない。何時の、そして何処の劇運動を見ても分る。アイルランドの劇運動では、イエーツ、シングは英国のものを借りはしなかった、イプセンの北方劇運動も同じこと。そのものをもってやれ！　北海道人の作ったものを北海道人がすることに「北海道の劇運動」としての価値があるのだ。[13]

小林多喜二は、イェイツ、シングのアイルランドの劇運動やイプセンの活動を参照して、東京の作家の書いた戯曲や海外戯曲の翻訳という「借物」ではなく、「北海道人」によって創作された脚本を上演することによって「北海道の劇運動」を起こすことを構想している。

一九二三年の関東大震災後には地方文化への関心が高まり、イェイツらに

よるアイルランド文学及び演劇運動は、農民による自己表現の必要性を掲げて一九二七年に創刊された『農民』を中心に、農民文学及び農民劇の先駆例という文脈によって捉え直されていく。初期『農民』において農民劇の理論を発表していた中村星湖は、「農民劇場の空想」（一九二五年）において「わが国の知識階級の間からも、アイルランドの戯曲家のやうな、地方人、事に農民生活を材料とした戯曲を作る人が出」て、「やがては農民階級からもさういふ作家を輩出させたい」と述べ、[14] 続けて同年の「空想と反響」においては「アイルランド劇の中などには、極めて自然にかつ極めて手軽にやれさうな物が幾つもある」[15] と、日本の農民劇において上演する際に適当な戯曲として、アイルランドの戯曲を「借用」することを推奨していた。[16] 日本の「地方人」、特に「農民階級」の人々が、「借物」ではない自分たち自身の表現活動を行う前段階として、アイルランド劇を「借用」することが慫慂されていたことがわかる。

日本の農民劇の先駆的な実践として中村星湖が『農民』にて紹介した福岡県浮羽郡山春村の劇団嫩葉会は、アイルランドの劇作家であるレディ・グレゴリー「月の出」（近藤孝太郎訳）、シング「海に騎りゆく人々」（細田枯萍訳）などを上演している。[17] 嫩葉会を率いた安元知之は、一九二三年一〇月七日の嫩葉会第五回試演会に際して、関東大震災に言及して「今度の大災は帝都集中の文化をば一変して国民全体の文化を作る機運を促す機会となるかも知れない」と述べている。[18]

中村星湖は、『北海タイムス』に掲載した「北海道の文学」（一九三二年）において、以下のようにアイルランド文学について言及している。

> 北海道にも（このにもを軽侮の意味に取らないで下さい）よそと同じやうに文学はあるのであるけれども、それはよそとあんまり変らない文学ではないか？　北海道らしくなくて、内地らしい、或は東京らしい文学ではないか？（中略）アイルランド文学を好むが故に、わざ〳〵あの国の西海岸のガルウェーまで旅した折の事などのふと思ひ出される朝です

／シングや、イエーツや、エー・イーのやうな、地方文学の俊秀が群がり起るやうになつたら、北海道は一層よい所になるでせう。[19)]

中村は、「内地らしい」あるいは「東京らしい」文学とは異なる特色を持つ「北海道らし」い「地方文学」運動の先行モデルとして、シングやイェイツ、A. E. らによるアイルランド文学を挙げている。前述した小林多喜二や安元知之の言葉と併せて考察すると、一九二〇年代から三〇年代前半の日本において、従来の「帝都集中の文化」だけではなく、「地方」からも独自の文化を発信する気運が醸成され、さらにそのことが、九州や北海道などの地方劇運動において、アイルランドの劇運動や戯曲が参照、受容された背景にあると言えるだろう。

農民劇の理論家である飯塚友一郎は、昭和初期の農民劇運動について、「農民の為に、農民の手になる農民劇場運動」が東京の新劇運動の影響なども受けて「全国に胎動」し、その中でも「とりわけ評判になつたのが、福岡県浮羽郡山春村の嫩葉会、信州諏訪の『町の劇場・村の劇場』、神奈川県下の『溝ノ口青年団演劇部』などの運動」[20)] であったと述べている。このうち、福岡県の嫩葉会と神奈川県の溝ノ口青年団演劇部については中村星湖が指導的立場で関わりを持っており、また、「町の劇場・村の劇場」に関しては主宰の伊藤松雄が、「独逸の方言劇場運動や、アイルランド劇運動を多年に亘つて調査してゐた私は、何時か必ず自分も、郷土劇運動の実践に身を投じたいと考へてゐた」と述べているように、いずれも何らかの形でアイルランド劇運動を参考にしていた。[21)] 伊藤が長野県上諏訪町で「村の劇場・町の劇場」を主宰し、「郷土劇運動」を推進するのは一九二六年のことであるが、大正末期から昭和初期にかけて日本各地で地方劇運動が起こった際、その指導者達によってドイツの方言劇場運動と並んでアイルランド劇運動がモデルとして参照されていたことは見逃してはならないであろう。昭和期においてアイルランド劇運動は、地方において地方独自の劇を創出し、上演した運動として、日本の農民文学運動及び農民劇という新たな文脈の中で受容されて

いったと言えるのである。

2. 農民文学運動の国策化とアイルランド文学受容の変容

昭和期の日本におけるアイルランド文学の受容とその変容は、農民文学運動の変容と連動していると考えられる。戦時体制の構築が進められる一九三八年一一月七日、農民文学懇話会が設立され、顧問に農相有馬頼寧、相談役に中村星湖らが就任する。翌一九三九年一月に創刊された農業報国連盟機関誌『農政』には、創刊号から「農民文学懇話会欄」が開設され、同会会員の活動報告や予定が掲載されていく。農民文学懇話会設立時に発表された有馬頼寧「農村理解の道は文学以外になし」では、有馬の次のような主張が展開される。

> 日本の存立にとつて農業が、そして農民が必要であるならば、国全体がそれを支持せねばならぬのは当然である。日本中の全部が農村を支持せねばならぬ、今までは関係者以外は全然農業問題を顧みないといふ実情であつたが、国を挙げて農民、農業、農村を考へるやうになる時が来なければ農民繁栄の時は来ない。（中略）そこで一番有力なものは何かと云へば、農民文学であると私は思ふ、農民文学の力を借ることなくして農村を一般に理解せしむることは不可能である。（中略）農民の間から盛り上つて来る気持に立脚した国策を私は樹てようとしてゐるのであるが、そのための材料を諸君が作り出して貰ひたい[22)]

第一次近衛文麿内閣の農林大臣有馬頼寧による「農民文学論」は、食糧確保と農民の離村を防ぐための農村振興のために、「国策」として文学を利用したと言えよう。『農民文学懇話会会報』第一号には、「農民文学懇話会は、農民文学の正しき歪まざる発展へといふ趣旨の下に集りたい。また、日満支を一体とする文化建設に礎石的な部分として役立ちたい」[23)] という指針が示

されている。発会式における有馬の祝辞における「農民関係者以外のものに農民と農村を理解して貰ふのに何が最も力があるかといへば、文学を措いて外にない」という言葉への応答として、島木健作の「国策の線に沿って積極的に活動する」という言葉が紹介され、[24] 中村星湖から「会員全部が作品をもつて大臣の御厚意に答へたい」という答辞があったという記録があるように、[25]「農民文学」はその書き手にとっても、作品を持って政策に寄与する文学活動、すなわち国策文学として認識されていた。この後、農民文学運動は総動員体制下において国策と結びつき、内務省及び大政翼賛会文化部による「民間娯楽政策」としての文学・劇運動という性格を帯びていくのである。

それらの文学活動の全容の解明には慎重な検討を要すが、一例として中村星湖が山梨県において展開した農民劇運動の様相を分析していきたい。一九三九年三月に「山梨文芸会」が組織され、「銃後文学の総親和　待望をこゝに山梨文芸会誕生　文学同線上の将兵慰問を議決」（『山梨日日新聞』一面、一九三九年三月一二日）等の記事や創作が掲載されていく。中村星湖はその発会式において「イエーツは死せず」という演題で講演し、イェイツやシングなどのアイルランド文学復興運動の作家たちを例に出して「郷土と民族とを愛すること」を説いている。「新なる文学動員」[26] として組織された山梨文芸会の発会にあたって、中村星湖がイェイツを引用するのは、当時のアイルランド文学の受容の様相を考えるうえで見逃せない事例である。

畑中小百合は、一九四〇年頃から「政府による演劇政策の一環として刊行された出版物」において、農村演劇の参考書として引用・参照されているのが一九二〇年代の農民文学運動の文献であることに注目し、「戦時下の農村演劇政策が一九二〇年代の農民文学運動の理念を底流とした」[27] と指摘している。実際、一九二〇年代から一九四〇年代にかけての農民劇を取り巻く社会的、政治的環境の変化にも関わらず、中村星湖『農民劇場入門』（一九二七年）、飯塚友一郎『農村劇場』（一九二七年）等の初期農民文学運動の文献が参照され続ける。[28] それに伴い、それらの文献において挙げられているアイルランド文学及びイェイツもまた、一九三九年の国策化した農民文学運動

においても先行モデルとして参照され続け、アイルランド文学やイェイツを受容する文脈は変容していくのである。

中村は、甲州人とアイルランド人は「その政治的位置ばかりでなく、その民族的気質まで」似ているとし、彼が「イエーツやシングの作品に絶大の興味を感じた」理由について、「非常に東洋的、殊に日本的、また殊に甲州的であつた」ためと述べる。中村は、アイルランド人は「英本国と喧嘩ばかりして来た」と述べると同時に、「山梨文芸会」の聴衆に対して、「中央政府徳川幕府に楯ついてばかり来た」「甲州の百姓――僕らの祖先とよく似てゐる」と述べる。中村は、「中央政府」に対する地方民衆による反抗として、アイルランドと「甲州の百姓」を重ね合わせて理解させようとしている。

さらに、「山梨文芸会」の発足にあたって、イェイツによるアイルランド文学運動を振り返ることが重要である理由について、以下のように述べる。

> 人はそれを「アイルランド文学運動」の名で呼んでゐるが、それはケルト民族の血を受けたアイルランド人の独立自主の政治運動と全然別箇の物とは僕には考へられない。すくなくとも、あの精悍無比で血の気の多い民族の精神が、政治的に現れてはシン、フエーン党の自治運動となり、文学的に結んではその詩または劇の運動となつたのだと信ずる。郷土と民族とを愛すること、かれらの如きは稀である。[29)]

中村は、イェイツ、レディ・グレゴリー、A. E. 、シングらの作家を、その作品を評価するよりもむしろ、「アイルランド文学運動」の担い手達として評価している。さらに、彼らの「文学運動」が英国からの「アイルランド人の独立自主の政治運動」と「別箇の物」ではなく、アイルランド人の「民族の精神」の政治的なあらわれがシン・フェイン党の自治運動であり、文学的なあらわれが詩や劇運動であると述べ、アイルランド文学を郷土愛、民族愛から発した文学運動のモデルとして讃美している。すなわち、ナショナリズムが、一方では文学運動に、他方では自治運動に結実して、アイルランドの

「独立自主」の運動を展開し得たとしてアイルランド文学を捉えているのである。一九二〇年代後期の初期農民文学運動におけるアイルランド文学受容では、中村星湖によるアイルランド文学及びイェイツに対する理解は、地方独自の文学、農民を描き出した文学という把握であった。それが一九三九年の時点では、ナショナリズムから発してアイルランドの国家としての独立自主を目指す政治運動と関連した文学運動という把握に変容していることに着目すべきであろう。

さらに、中村は、一九三九年一月二八日にイェイツが死去したことに触れ、「かれの精神、殊にアイルランド文学を復興した精神、ヨーロッパ諸国に対してばかりでなく、全世界の諸国、諸民族に対して、郷土を愛し、郷士の文学を学ぶことを教へたあの精神は死なゝい」[30] と主張する。そして、イェイツは詩人や劇作家として活躍したが、中村はイェイツの「功労は一個の作家としてよりも、一個のアイルランド文芸家を正しく導いたその文芸運動にある。殊には、近代劇界の天才シングの進路を明示した点にある。そのためにかれは永久に死なゝい」と言うのである。イェイツを文学者としてというよりもむしろ文学をめぐる運動家、事業家の先駆者として評価する中村星湖の姿勢は、「かれはアイルランド文学運動の先駆者で、其詩も劇もすぐれたものであるが、かれの功績として永く伝ふべきは、其作品よりもその事業（文学運動）であ」るという言葉にもあらわれている。[31]

中村は、「文学と政治の歩み寄り」を肯定しながらも、「なぜイエーツがすゝめてシングを郷里へ帰したことを諄々と述べて来たか、そこをよく考えて呑み込んで貰ひたい」と述べ、人々に自らの故郷に帰り、地方の文学運動、劇運動に携わることを推奨した。つまり中村星湖は、日本のナショナリズムに接近させた形でイェイツの活動を位置づけ、郷土愛や民族愛の発露としての文学、そして〈事業としての文学運動〉の重要性を明らかにした作家としてのイェイツ像をつくりだし、顕彰したのだと言える。この創出されたイェイツ像は、西欧の影響を脱し、日本の民族性や郷土愛から生じた文学を復興させることが良い文学を生み出すという日本のナショナリズムと接続さ

れ、狭義には山梨という郷土に根差した文学を創造することが重要であるという論理へと接続されるのである。

一九四〇年二月一一日には山梨県産業組会館において第一回農村演劇競演会が開催され、同年、農山漁村文化協会の斡旋のもと山梨農村文化連盟が成立し、山梨県内の各地で「農村演劇隊」の結成が進められる。一九四〇年八月二五日には、中村星湖が編輯主任となり、富士五湖地方文化協会発行の「郷土研究雑誌」として『五湖文化』が創刊された。中村星湖は、一九四一年一一月四日にはラジオ甲府放送局にて農村演劇について話し、[32] 翌日には山梨県大政翼賛会山梨県支部主催の山梨文化懇談会において農村演劇について講演するなど、積極的に農村演劇の普及・啓蒙活動を行っている。さらに彼は、一九四二年には日本文学報国会農民文学委員会の委員長及び大政翼賛会の素人演劇研究委員会の研究委員に就任している。

素人演劇の理論家としても活動していた教育学者宮原誠一は、「農村演劇運動の政治性」（一九四三）において、農村演劇運動は「慰安娯楽といふ点よりはむしろはるかに強く啓蒙宣言活動乃至政治教育の手段として取り上げられやうとしてゐるといふ基本的方向」において、「従来の好事家的＝村芝居的な素人（乃至半玄人）演劇の流れと本質を異にしてゐる」と述べている。[33] ここからは、総動員体制下で推進された農村演劇運動が、大政翼賛会及び農山漁村文化協会による「指導」の下で推進されていった国策的性格の強い事業であり、演劇によって「啓蒙宣伝活動乃至政治教育」を行う〈上からの翼賛運動〉的な性格を持っていたことがうかがえる。宮原は、大政翼賛会や農山漁村文化協会の「指導斡旋のもとに、近頃各所の農村で素人演劇が行はれて」おり、特に「山梨県では農村演劇運動のさかんな点では全国に魁けてゐる」と記し、「全国的な運動にまで発展する素地は充分にある」と山梨県で行われているような農村演劇運動を全国的に展開することを期待している。[34] つまり、中村星湖による山梨県での農村演劇運動は、単なる一地方の事例に留まらず演劇を通した「啓蒙宣伝活動乃至政治教育」の手段としての農村演劇運動を全国的に展開していくためのモデルとして注視されていた

ことがわかるのである。

中村星湖は、『五湖文化』（一九四一年五月、農民劇特集号）において、以下のように述べている。

> （論者注：大政翼賛会の）組織局が国家下部組織殊に隣組制度を復活させ、地方組織殊に地方協力会議を促進し、また同会の文化部が取分け地方文化の発揚に力をそゝぎ、引いては民衆の娯楽休養を鼓舞して、堅実な希望と明朗な気分とを持たせるに到つた（中略）今後は、下からの翼賛運動を、国民みづからが実現してゆくべきであらう。（中略）政府及び翼賛会が民間娯楽政策として取揚げたものゝうち、健全な音楽と演劇とが主位を占めてゐるのは諸君周知のことである[35)]

中村は一見、民衆に自己表現の機会を与えるという一九二〇年代の初期農民文学運動の当初の目的を保持したまま、国策に沿った「健全」な文学や演劇によって民衆を「国民」として教化するための地方文芸会、地方劇の活動を推進したというように見える。ただし、中村星湖が農民劇について、「下からの翼賛運動を、国民みづからが実現してゆくべき」と述べている理念は、前述した有馬頼寧による「農民の間から盛り上つて来る気持に立脚した国策」[36)] としての農民文学の推進の要請に応えたものであり、国策によって統制された自己表現に過ぎない。

戦時下の農村演劇運動をめぐっての、政府主導によって強力かつ早急に組織化されつつも「国民みづから」によって実現される「下からの翼賛運動」という性格付けは、一九四〇年八月二八日の第一回近衛新体制準備会において発表された「新体制準備会ニ於ケル近衛内閣総理大臣声明」における「国民をして国家の経済及文化政策の樹立に内面より参与せしむるもの」という近衛新体制の構想と軌を一にしている。[37)] 近衛声明では、「国民組織が完成される為には一つの国民運動が必要」であるが、このような「国民運動は国民の間から自発的に盛り上つて来るべき」とはっきりと述べられている。[38)] な

ぜならば、「政府がこの種の運動を企図指導し又は之を行政機構化することは国民の自発的総力の発揮を妨ぐるの處がある」[39] ためである。

プロレタリア演劇運動に影響を受けた素人演劇活動が厳しい規制の対象となったのに対し、総動員体制化では「下からの翼賛運動」という性格を帯びた自主的な演劇運動が政府主導によって推進されることになるのである。小川史は、この時期の演劇運動をめぐる政策の「自発性」という性格に着目し、「終戦まで、演劇による表現空間は政府および政府関連組織によって、政策的に形成が目指されるが、その際、素人演劇運動は、警察的な抑圧を前提に、自発性を引き出しつつ同時にそれを国策的な方向へ導くという、きわめて難しい課題を引き受けてゆくこととなった」と指摘している。[40] すなわち、政府の主導によって政府関連組織が地方に設立されていき、「国民」の精神を総動員するための文化空間の急速な組織化が行われる中で表現活動への強い規制と方向付けがなされているのは明白ではあるが、その建前としてはあくまでも地方の農民による自主的な表現活動が称揚されていたと言えるだろう。

農村演劇をめぐる中村星湖の言説は、「国民」による自主的な表現活動である農村演劇による「下からの翼賛運動」という性質の運動を推進していくという国策に応える形で展開されたものである。まさにこの民衆による「下から」の自発的な表現活動としての文学運動が、同時に政治的な運動と結びついて展開するという構想にこそ、戦時下の農民文学運動においてイェイツらアイルランド文学復興運動が参照された理由が求められるのだ。そのような動きの中でイェイツは地方劇運動のアイコンとなっていく。戦時下における文学の役割を政治との接近と国策文学に見出した中村星湖らによってイェイツは、アイルランドの民衆のナショナリズムの発露を、政治的な運動と並走したアイルランド文芸復興運動として事業化した人物として表象された。イェイツのイメージは総動員体制下における民衆の国民化に寄与する形で変容を蒙り、農村演劇運動の言説に取り込まれていったと言える。一九二〇年代後半の初期農民文学運動では、首都東京中心になっている文学潮流に対し

て地方の文学・文化運動の興隆を期待する言説において、アイルランド文学が参照されていた。しかし、総動員体制下の日本においては、アイルランド文学はナショナリズムの文学的なあらわれとして、国策文学の文脈のなかで受容されていったという変容が見られるのである。

3. 戦時下日本におけるアイルランド文学及びイェイツ表象の特異性

一九三九年一月二八日のイェイツの死は、日本でも報道され、作家や研究者による追悼文が掲載された。これらの追悼文にはいくつかの共通した特徴があり、それらはイェイツを鏡として一九三九年の日本を映し出している。一点目には、イェイツの文学を通して、アイルランドと日本の類似性を強調するという特徴である。山宮允は「イェイツの訃に接して」(『帝国文学』一九三九年二月)において、イェイツの作品について「唯美主義乃至象徴主義」的特色があったと指摘しながらも、イェイツの文学が「常にケルトの民族性を基調とし特色」とした「民族文学」であったことを強調している。[41)] そして、大正期にイェイツらアイルランド文学の翻訳や紹介が盛んであったことを回想し、「我が国民性と一味相通ずる所あるこのケルトの民族性のために彼の作品は吾々の心を牽き、吾々を喜ばせ」たと回想している。

注目すべき点は、山宮允が大正期から昭和初期にかけての日本においてアイルランド文学が盛んに受容された理由について、「英文学のクラシックス」から「イエイツ一派の愛蘭の新文学に目を移し」たら、「洋食の後の日本料理のやうな親しみ」を覚え、アイルランド文学を「我が国民性に近似せるケルト民族の性情の端的な表現」として受け止めたと書いていることである。アイルランド文学は、英語で書かれた西洋文学ではあるが、日本の「国民性」に類似した民族によって書かれた文学として位置づけられているのである。

二点目として、イェイツの追悼文には、イェイツやアイルランド文学の日本人や日本文学との類似性から派生し、イェイツを「日本」の理解者とし、「日本人」「日本精神」を世界へと伝えることのできる文学者として捉え

るという特徴である。例えば英文学者・詩人の矢野峰人は、追悼文「イエイツと日本」(『文藝春秋』一九三九年三月）において、イェイツが「日本人」と「日本文化」の理解者であったことを特筆し、「日本人が如何に芸術的に豊なる天分と感性とに恵まれた国民であるか」は、イェイツが「日本の香道を語り美術文学を賞揚し刀剣を愛玩するする際、口癖のやうに洩らす所であつた」と書いている。[42] そして矢野は、イェイツに「日本の美を示すといふ事は、やがて真の日本精神を正しくまた最も効果的に世界に紹介する事である」とし、「改造社がラツセルやアインシユタインを招いたやうに」イェイツを日本に招聘し、「日本印象記を書かせる事が出来たなら」と続けるのである。[43] ここでは、矢野がイェイツを「真の日本精神」を「最も効果的に世界に紹介」することが出来る存在、すなわち西洋に対して日本文化の卓越性を宣伝してくれる西洋人として位置づけられていたことがわかる。

このような「イェイツ」像は伊藤道郎によって、より露骨な形で表現されている。[44] 伊藤は、英国・中国と日本の演劇の演出手法を比較し、雪を表現するために「紙を細かく切つて」降らせたり、生きた木を舞台に乗せる中国及び「英国の芝居」を「最も原始的な、幼稚な手法」と述べる。それに対し、「馬も何もゐないけれども、そこに馬を生かして乗つてゐる」という手法を用いる能の「鉢の木」を「これが芸術である」と礼賛する。「能」の翻訳から成るフェノロサの遺稿をエズラ・パウンドが編輯した「能」(*Certain Noble Plays of Japan*, 1916)[45] が、「欧米の詩人、作家、劇作家」を「非常に感激」させ、「当時全く行きづまつてしまつてゐた欧米の写実劇が、これに依つて活路を得た」とまで述べ、伊藤を通して能の影響を受けた文学者の代表例としてイェイツを挙げている。つまり、イェイツは「アイルランドの芝居で行きづまつてしまつて、もう劇は書かないと言つてゐたところ」だったが、伊藤の舞踏に「感激して私の為にプリンス・イゴール（鷹の井戸）を書き下してくれた」のである。伊藤は、日本の能が「行きづまつて」いる西欧近代文学・文化に影響力と「活路」を与え、日本が西欧を超克し得ることの証左として、イェイツを例に出していると言えよう。

英文学者で翻訳家の平田禿木は、「イエーツと日本古典」（一九三九年）において、イェイツの功績を「東洋文化に対するその奇しき理解」であるとする。平田は、イェイツの「鷹の井戸」（*At the Hawk's Well*、初演一九一六年、刊行一九一七年）等の舞踏劇を挙げて、「我が能楽の影響が直接このアイルランド劇詩人に及んだ顕著な一例として、東西文化史の上に見逃すべからざる大事実」と書く。平田禿木も、イェイツを「能楽」をはじめとする日本文化・東洋文化の理解者であり、能楽が西洋近代演劇に与えた影響力の大きさを示す例としてのイェイツ像を押し出している。[46] これらの言説には、西洋人であるイェイツを用いることによって、西洋文化を超克し得る日本文化の特殊性、卓越性を顕彰すると共に、「能楽の影響」を「東西文化史」の一例として挙げることによって、日本文化の世界への影響力を示すという意図が見え隠れする。イェイツへの追悼文には、日本文化の世界へのプロパガンダの手段としての有用性からイェイツの功績を評価するという偏りが見えるのである。

さらに、三点目としてはイェイツを通して地方回帰乃至「日本回帰」を訴えるという特徴である。平田は、パリにいて「大陸文学の研究に没頭してゐた」シングに向かって、イェイツが「アイルランドへ帰れ、そして君の郷里へ籠つて、静かにその民と生活を見よと勧めた」というエピソードを記す。

> 我等がこの数十年来欧州の新文化に接し来つたのは、シングの大陸遍歴と同じに、決して徒労のものではない。が、我等は今、シングがアランの嶋に帰つたやうに、日出づる東海のこの島へ戻つて、その古典に浸り伝統に甦つて、茲に新たなる文化を生み、これを広く洋の東西におし広めなければならない。[47]

この部分は、イェイツが「フランス文学の批評」家を目指すシングに対してアイルランドに帰郷することを勧めたことによって、シングがアイルランドの劇作家として才能を開花させたというエピソードを引用することで、明治

以来「欧州の新文化」に接してきた日本人も、今こそ日本の古典や伝統文化に回帰することを勧めるという意図が明瞭である。日本の古典や伝統に回帰することで、日本文化の独自性を見つめ、そこから「新たなる文化」を生み出すことが可能であり、世界的に影響力を及ぼしていくべきであるという日本回帰論に、「イェイツ」とアイルランド文芸復興運動は用いられていくのである。

4. 戦時下における「日本人の文学奉公の一助」としてのアイルランド文学

「英米文学」から「英語文学」としてのアイルランド文学を切り離して論じる文章は、一九四〇年代に散見される。その背景には一九三九年九月一日のドイツ軍のポーランド侵攻に際し、英・仏が宣戦布告して第二次世界大戦が勃発すると、エール首相イーモン＝デ＝ヴァレラが議会の支持を得てアイルランドの中立を宣言したというアイルランドをめぐる国際情勢がある。一九四〇年七月には外務省情報部により、「英独決戦と愛蘭島の情勢」が以下のように報告されている。[48] すなわち、ドイツ軍の対英総攻撃開始が切迫するに従い、「軍事的要衝を占めるアイルランド島」の政治的姿勢が「俄然注目の的」であったが、「アイレ首相デ・ヴアレラ氏は英独いづれに対しても厳正中立の方針を堅持する旨の声明を行つた」というものである。また、斎藤栄三郎『英国の世界侵略史』（一九四〇年）における「今や独立国の地歩を得たアイルランドが被征服の象徴たる北アイルランドの現状に決して満足するものではな」く、「アイルランド全島を単一体として完全なる独立を回復しなければやまない」[49] という分析に見られるように、日本においてアイルランド自由国は、英国からの「完全なる独立」を目指して「中立」を守る存在として捉えられた。その結果、この時期の日本において、英語で書かれたアイルランド文学は、英国からの「完全なる独立」を目指す、あるいは「独立国の地歩を得た」国の作家達によって書かれた文学として、「英文学」とは異なる受容のされ方がなされたという側面があることを指摘できるのだ。

菊池寛は、一九四二年に「米英的思想の排撃と云ふことが、盛んに叫ばれてゐる」が、「文学に関する限り、昔から米英的思想の影響など受けたことは、皆無と云つてよい」と言い切る。[50] さらに、「日本の文壇は、昔から米英嫌ひである。嫌ひであると云ふより、米国や英国の文学を認めてゐない」と述べるのである。菊池寛は、京都帝国大学英文科を卒業し、英文学者の山本修二と共著で『英国愛蘭近代劇精髄』（新潮社、一九二五年）を刊行するなど英文学関係の文章も多く執筆しており、英米文学が日本近代文学に与えた影響は充分に把握していた。しかし菊池は、アメリカ、イギリスが敵国となった一九四二年において、日本近代文学におけるアメリカ、イギリスの文学的・思想的影響を「皆無」だったと述べるのである。菊池は、「英文学などは、現代の日本文学に殆んど何の交渉もないと云つていゝ位であ」り、「米国の文学などは、その水準に於て、世界の二流文学である」と、日本における英米文学の影響を否定する。注目すべき点は、「敵性言語」の英語で書かれていてもバーナード・ショーについては、彼が「自ら愛蘭人であると称し、その文学は反英的である」ため、「米英的思想」から除外している点である。戦時下日本において英米の思想・文学を排撃するという動きが盛んとなるなか、英語で書かれた「英語文学」のなかで、アイルランド文学は「反英的」であると捉えられ、英米文学の枠組みから外すという特殊な受容のされ方がなされていたことが指摘できるのである。[51]

その顕著な例が、勝田孝興『愛蘭文学史』（生活社、一九四三年）[52] である。日本の戦時体制における書物の一元的流通を担った国策的配給会社である日本出版配給株式会社[53] により配給された同書の序文において、勝田は、「イェイツ、グレゴリー女史、エイ・イー、シング等に依て起された新しい愛蘭文学」が、アイルランドの特徴を「最もよく写し出し」たものとして、「世界の読者」を「驚喜」せしめたと述べ、一九四三年当時の日本においてアイルランド文学史を学ぶ意義を以下のように主張している。

聖戦茲に六年＝＝＝愛蘭文学は英国多年の圧迫――英国文学の支配――

> から独立した愛蘭独自の文学である。文学は人の心の鏡である。愛蘭文学の研究は、英国人の心の支配から独立した愛蘭人の心の研究であるとも云はれ得る。此意味に於て此一書が幾分たりとも日本人の文学奉公の一助ともならば著者の幸是に過ぐるものは無い

勝田は、アイルランド文学をいわゆる「敵性言語」で書かれた「英語文学（広い意味の英文学）の一部ではあるが、日本人に最も深く訴ふる大自然と国民性とを持ち」、「保守的な英国の文学」とは異なる「特異な独創性」を持った文学であると述べた上で、一九四三年の戦時下の情勢においてこそアイルランド文学史の研究書を出版し、学ぶ意義があることを述べる。さらに、勝田は、アイルランド文学の研究を、一九三七年から続く日中戦争、アジア・太平洋戦争という「聖戦」下における「日本人の文学奉公」に繋がるものとして位置づける。少なくとも本書の序文において、彼はアイルランド文学をアイルランド人のナショナリズムの発露として捉え、反英国という目標を共有しているという意味で、アイルランドを日本に重ね合わせ、戦時下日本におけるナショナリズムを喚起する手段として、アイルランド文学を学ぶ意義を見出していると言える。

英国の支配から独立した国としてアイルランドを理想化し、「英国人の心の支配」からの「独立」をアイルランドの人々にうながした文学としてアイルランド文学を紹介するこの文章は、アジア・太平洋戦争を日本にとっての「聖戦」として位置づけ、文学者の国策への順応を正当化するという文脈においてこそ、アイルランド文学が求められたという戦時下日本におけるアイルランド文学受容の特殊性をよくあらわしていると言えるだろう。しかし、勝田の『愛蘭文学史』の本文を分析すると、「序文」で書かれた主旨とは逆に、日本のアジアへの侵出へと疑念を抱く可能性も内包しているのではないかと考えられる箇所もある。一見国策に順応しているような文章を発表しつつも、戦時下においても地道にアイルランド文学の研究を続けた研究者達は、アイルランド文学の研究を発信することによって日本の帝国主義への

間接的な批評的姿勢を保持しようとしていた可能性はないのだろうか。このような戦時下におけるアイルランド文学などの「英語文学」の受容の様相についてのより包括的な考察については、前述した菊池寛、勝田孝興を含む幾つかの事例への慎重な検討を含む、より詳細な個別事例の分析と、戦前、戦中、戦後を通した通時的な考察が必要であると同時に、アイルランド文学関係の出版についての戦時統制とジャーナリズムの関係についての検討が必要であり、稿を改めて論じる。

おわりに

本稿では、一九二〇年代後半から一九四〇年代前半の戦間期から戦時期の日本におけるアイルランド文学の受容に関して、一九二〇年代からの農民文学運動との関わりを確認したうえで一九三〇年代後半に農民文学運動が国策化してからの受容の様相を検討した。次に、戦時下の政策とアイルランド文学受容及び「イェイツ」表象が関わっていたことを確認してきた。以上の議論を通して、戦間期から戦時期の日本におけるアイルランド文学受容の特殊性、特に戦時期の日本において英語で書かれたアイルランド文学及びイェイツという作家について、その文学作品は所謂「敵性言語」で書かれているが「反英的」という意味で日本のナショナリズムに接続される形で受容されたという特異な位置づけを明らかにした。

日本におけるアイルランド文学の受容を考える場合、一九二〇年代からの地方における文学運動の高まりと呼応するように、アイルランド劇運動が地方文学・地方劇運動の先行モデルとして参照されるようになる現象が顕著になる。地方の農民による自己表現の必要性を掲げて一九二七年に創刊された『農民』には、中村星湖らによるイェイツらのアイルランド劇運動を農民文学及び農民劇の先駆者という文脈によって捉え直す論考が掲載されていく。

しかし、戦時体制の構築が進められる一九三九年に農相有馬頼寧の主導で農民文学懇話会が設立され、翌年「土の文学動員」が主唱されると、農民文

学運動は大きな転機を迎える。つまり、農民文学運動は総動員体制下において国策と結びつき、内務省及び大政翼賛会文化部による「民間娯楽政策」としての素人演劇運動となって展開していく。農民文学者らは、民衆に自己表現の機会を与えるという運動の目的は保持したまま、国策に沿った「健全」な文学や演劇によって民衆を「国民」として教化するための地方文芸会、地方劇の設立を推進した。そのような動きの中で、中村星湖は一九三九年三月に「文学動員」として組織された「山梨文芸会」の発会式での「イエーツは死せず」という講演の中で、イェイツをアイルランド文学運動の運動家として捉え、アイルランド文学運動を民衆のナショナリズムが発露した表現形態であり、「独立自主の政治運動」と連動したものであると述べている。アイルランド文学やイェイツ表象は、地方劇運動の指針として目されることに加え、総動員体制下における民衆の国民化をめぐって構築された文学の戦時的役割に関するナラティブの中に組み入れられていったと言えるだろう。

戦間期から総動員体制下の日本においてアイルランド文学は、一点目には「地方」文学運動の先駆例として、二点目には政治と結びついた文学として、三点目には反イギリスの文学として、新たな文脈のもとで受容されていく。一九三九年のイェイツの死に際して執筆された追悼の文章では、事業家、運動家としての面がクローズアップされ、彼のイメージが帝国日本のナショナリズムと日本回帰論の推進に利用されていく様相を見て取ることが出来る。一九四三年に刊行された勝田孝興『愛蘭文学史』における、アイルランド文学史を学ぶことは「日本人の文学奉公の一助」となるという主張は、顕著な例と言えるだろう。ここには、英国の文化的影響力から自主独立するという気運のなかで盛り上がったイェイツらのアイルランド文芸復興運動を、全く文脈の異なる、戦時期の国家総動員体制下の帝国日本における文学の国策への奉仕へと接続するという捩じれが見られる。しかし、このような理由付けがなければアイルランド文学の研究を発信できなかったという研究者、文学者が置かれた厳しい立場も伝わってくるのではないだろうか。一九三〇年代から四〇年代の日本におけるイェイツの読まれ方／受けとめられ方は、発

祥文化を越えて流通する文学作品及び作家表象の可変性を映し出していると言えよう。戦間期から戦時期日本におけるアイルランド文学とイェイツをめぐる言説の変容――この事例は、海外文学と〈文学者像〉の翻訳や紹介の形は、受容側の政治的、社会的状況によって大きく変容することを明らかにする。そして、海外文学の研究、翻訳、紹介が否応なく帯びる政治性について、大きな示唆を与えてくれるのだ。

［年表］

日本近代におけるW. B. イェイツ受容関連年表　1931-1945
本年表は、1931年から1945年までに活字になった「W. B. イェイツ」に関する単文（紹介記事・評論・随筆・劇評・追悼文）・翻訳及び刊行された単行本を収録したものである。拙著『越境する想像力』（大阪大学出版会、2014年）及び拙論「日本近代文学におけるアイルランド文学受容―翻訳と紹介記事をめぐって―」中の「日本近代文学におけるアイルランド文学受容関連年表　1895-1930」（『エール』第33号、日本アイルランド協会、2014年）をもとに、大幅に加筆・修正した。

年	日本におけるW. B. イェイツ関連記事
1931 昭和6年	喜志邦三『現代イギリス詩集』（東北書院、1931）にイェイツ詩の訳「柳苑」収録。 矢野峰人『片影』（研究社、1931）
1932 昭和7年	西條八十訳「海外恋愛名詩集」（『蝋人形』1932.1）にイェイツ詩の訳「ええづは失はれたる愛を嘆く」「女ごころ」「酒の唄」収録。 長沢才助訳、イェイツ『日本の能楽』（雄文閣、新時代学芸叢書第二部、1932.2）※日高只一「イエーツの文芸と日本の能楽」、長沢才助「日本の能楽」、長沢才助訳「鷹の泉」（*At the Hawk's Well*）収載。 岡田哲蔵訳、イェイツ「鷹の井」（『英詩文の片影』（新生堂、1932） 山本修二『英米現代劇の動向』（創元社、1932） 執筆者未詳「イエーツの詩」（『新岩手人』1932.7.25） 中村星湖「北海道の文学」（『北海タイムス』1932.8.30-31）
1933 昭和8年	尾島庄太郎『ブレイクとセルト文学思想』（富山県東水橋町（出版社表記なし）、1933） 矢野峰人『アイルランド文学史』（新英米文學社、1933.9） 佐藤清「愛蘭詩の現状」（山宮允・佐藤清・中村喜久夫『英米近代詩研究』金星社、1933.10） 八住利雄編『アイルランド神話傳説集』（神話傳説大系、誠文堂、1933）
1934 昭和9年	大木惇夫『抒情詩集　カミツレ之花』（鬼工社、1934）にイェイツの訳詩「われは幼く」収録。 尾島庄太郎『英米文学評伝叢書81　イェイツ』（研究社、1934） 南江二郎「イェーツの舞踏詩劇研究」（『文芸外科読本　随筆集』立命館出版部、1934） 山宮允「イエイツ」『岩波講座世界文学　第5巻　近代作家論』（岩波書店、1934）

1935 昭和10年	山宮允訳『隊を組んで歩く妖精達（アイルランド童話集）』（岩波書店、岩波文庫、1935.3） 坪内逍遥「北日本と新文学」（国劇向上会編『芸術殿』5（8）、四條書房、1935.8） 矢野峰人『近代英詩評釈』（三省堂、1935）に、イェイツ *Into the Twilight, He Gives His Beloved Certain Rhymes, A Poet to His Beloved, The Lake Isle of Innisfree, The White Birds, The Song of Wandering Aengus, The Lover Tells of the Rose in His Heart, He Reproves the Curlew* 収録。 L. A. G. ストロング、根本彦一訳『イェイツへの公開状』（稲光堂書店、1935.9）
1936 昭和11年	尾島庄太郎「アイルランド文学史」（『世界文芸大辞典』第七巻、中央公論社、1936）
1937 昭和12年	日夏耿之介『海表集　日夏耿之介訳詩集』（野田書房、1937）イェイツの訳詩「酒ほがひ」「叡智は時と偕に来る」「恋のあはれ」「落葉のうた」「晧禽歌」収録。 原一郎「後期のイェーツ」（『四季』（第二次）1937.3） スティイヴン・スペンダア、阿比留信訳「リアリストとしてのイエイツ」（『三田文学』1937.9） H. A. メエイスン、小林善雄訳「イエイツ編「牛津現代詩華集」」（『三田文学』1937.9）
1938 昭和13年	7月5日、尾島庄太郎がダブリンにてイェイツにインタヴューを行う。（Shotaro Oshima, “*An Interview with W. B. Yeats.*” *W. B. Yeats and Japan*. Tokyo: Hokuseido, 1965.）
1939 昭和14年	上田義雄『リーダーの名詩解説』（研究社、1939）にイェイツ「イニスフリ湖島の鳥」収録。 山宮允「イェイツの訃に接して」（『帝国文学』1939.2） 山宮允「エイ・イー及びイエイツに見ゆるの記」（『蝋人形』1939.3） 山宮允訳、イェイツ「イエイツ詩抄（一）」「同（二）」「同（三）」（『蝋人形』1939.2、3、5） 中村星湖「イエーツは死せず（上）山梨文芸会発会祝辞」（『山梨日日新聞』1939.3.19） 中村星湖「イエーツは死せず（下）山梨文芸会発会祝辞」（『山梨日日新聞』1939.3.26） 平田禿木「イエーツと日本古典」（『禿木随筆』改造社、1939） 矢野峰人「イエイツと日本」（『文藝春秋』1939.3）

1939 昭和14年	安藤一郎訳、イェイツ「英町の草地」「美しき舞姫」(『蝋人形』1939.3) 西條八十訳、イェイツ「失はれたる愛(〈鑑賞評釈〉わが愛吟詩(36)」(『蝋人形』1939.3) 亀山豚訳、イェイツ「夢」(『四季』(第二次)1939、春季号) 大塚正憲訳、イェイツ「幻影」(『新領土』1939.3) F. R. リイヴィス、近藤東訳「イエイツ氏の閲歴」(『新領土』1939.3) スティーヴン・スペンダア、永田助太郎訳「リアリストとしてのイエイツ」(『新領土』1939.3) 清水暉吉「イエーヅと能」(『中央公論』1939.3) 安藤一郎訳、イェイツ「五つのイメヂ」(『文藝汎論』1939.7)
1940 昭和15年	伊藤道郎「イエーツとお能」『アメリカ』(羽田書店、1940) 楠山正雄『近代劇十二講　下』(新潮文庫、1940)中、第十一講「近代劇運動五　独・墺及びアイルランド劇団の新風味」 福原麟太郎『叡智の文学』(研究社、1940) W. H. オーデン、上田保訳「詩人の本質―W. B. イエーツに関連して―」(『蝋人形』1940.6)
1941 昭和16年	山本修二訳、レノックス・ロビンソン、“W. B. Yeats : The Dramatist.”(『英語青年』第85巻2号－4号、1941.4.15－5.15) 山本修二『演劇と文化』(教育図書株式会社、1941) 燕石猷訳、イェイツ「ベイラとエイリンとが塋墳にてリイブの唄へる」(『豊葦原』第3年6月号、赤門書房)※現物未確認(『イェイツと日本　展観目録』に拠る) 日夏耿之介『英吉利浪漫象徴詩風』(上下巻、白水社、1941)下巻に「イェイツ伝覚書」収録。 原一郎訳、イェイツ「吾が男子の為の祷」(『詩洋』1941.11)
1942 昭和17年	尾島庄太郎「愛蘭気質と英吉利気質」(『早稲田文学』1942.2) 菊池寛「話の屑籠」(『文藝春秋』1942.7)後、『英語青年』(1942.11.15)に「菊池寛氏の英文学観」として紹介される。 斎藤勇訳編『英詩鑑賞』(研究社、1942年)にイェイツの詩 *The Two Trees, The Lake Isle of Innisfree, A Dream of a Blessed Spirit, He Tells of the Perfect Beauty, A Cradle Song* 収録。
1943 昭和18年	入江直祐訳『ブレイク詩集』(新潮文庫、1943)にイェイツ「詩神文庫ブレイク詩集序」収録。 勝田孝興『愛蘭文学史』(生活社、1943) 山本修二「愛蘭国民演劇」(『演劇論　5　演劇運動』河出書房、1943年)

1943 昭和18年	山宮允訳、イェイツ「牧人哀歌」(『蝋人形』1943.6) 山宮允訳、イェイツ「牧人懐旧篇」(『蝋人形』1943.8)
1944 昭和19年	
1945 昭和20年	

［参考文献］

日本イェイツ協会・早稲田大学図書館編『イェイツ生誕百年記念展　イェイツと日本　展観目録』(日本イェイツ協会・早稲田大学図書館、一九六六)、市川勇『アイルランド文学』(成美堂、一九八七)、上野格・アイルランド文化研究会『図説　アイルランド』(河出書房新社、一九九九年)、上野格「日本におけるアイルランド学の歴史」(『思想』一九七五・十一)、同「明治初年のアイアランド論－若山儀一(NORIKAZU WAKAYAMA, 1840-91)の著作から」(『エール』第5号、日本アイルランド協会学術研究部、一九八七・七)、同「戦前のわが国におけるアイルランド史研究文献について(1)」(『成城大学経済研究』第49号、一九七五)、河野賢司『周縁からの挑発　現代アイルランド文学論考』(渓水社、二〇〇一)、栩木伸明「尾島庄太郎のイェイツ研究とその後の学統」(『英文学』95、早稲田大学英文学会、二〇〇九・三)、風呂本武敏「愛蘭―民衆派―アメリカ」(『富田砕花の世界』展図録、芦屋市立美術博物館、一九九八)、同『見えないものを見る力』(春風社、二〇〇七)、前波静一『アイルランド演劇　現代と世界と日本と』(大学教育出版、二〇〇四)、松尾太郎『アイルランドと日本　比較経済史的接近』(論創社、一九八七)

［注］

1)　W. H. Auden, 'In Memory of Y. B. Yeats', in *Collected Poems*, ed. Edward Mendelson (London: Faber and Faber, 2007). pp.245-247. W. H. オーデン、岩崎宗治訳『もう一つの時代』(国文社、一九九七年)を参照した。
2)　デイヴィッド・ダムロシュ『世界文学とは何か』(国書刊行会、二〇一一年)、p.17
3)　W. H. オーデンの詩とダムロシュの議論を通して「世界文学」としてのイェイツを考えるという問題には、本稿の元となったシンポジウムでの栩木伸明氏の報告(発表要旨は、栩木伸明「イェイツ再読――〈世界文学〉として(2)」(『イェイツ研究』No. 49、日本イェイツ協会、二〇一八年)に掲載)に多くの示唆を得た。記して謝意を示したい。

4）　早稲田大学・日本イェイツ協会編『イェイツ生誕百年記念展　イェイツと日本』（早稲田大学図書館、日本イェイツ協会、一九六六年）
5）　鈴木弘「W. B. イェイツと日本――文化交流（其の 2）」（『教養諸学研究』一〇六号、早稲田大学政治経済学部、一九九九年三月 ）。同「W. B. イェイツと日本――文化交流（其の 1）」（『教養諸学研究』一〇四号、早稲田大学政治経済学部、一九九八年三月 ）、同「イェイツを日本に導入した先覚者たちとイェイツの日本文化への憧憬」（『イェイツ研究』三八号、二〇〇七年）も参照。
6）　山田朋美「戦間期日本におけるアイルランド認識」（『国際関係学研究』三四号（二〇〇七）、二〇〇八年三月発行）
7）　日本の英学一〇〇年編集部編『日本の英学一〇〇年』（全三巻及び別巻、研究社、一九六八－一九六九年）、特に『日本の英学一〇〇年　昭和編』（一九六九年）参照。
8）　川澄哲夫編『資料日本英学史2　英語教育論争史』（大修館書店、一九七八年）
9）　宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』（研究者、一九九九年）
10）宮崎芳三、前掲書参照。
11）齋藤一『帝国日本の英文学』（人文書院、二〇〇六年）
12）拙著『越境する想像力　日本近代文学とアイルランド』（大阪大学出版会、二〇一四年）にて、明治期から昭和期におけるアイルランド文学受容の様相について考察した。
13）小林多喜二書簡、小林三吾宛、一九二七年一〇月二四日付（『底本小林多喜二全集』第一四巻、新日本出版社、一九六九年）
14）中村星湖「農民劇場の空想」（『文藝春秋』一九二五年六月。後に農民文藝叢『農民劇場入門』春陽堂、一九二七年に収録）。農民劇及びそれに関わる運動を指す用語は、同じ文学者であっても時期、地域、運動の性格によって変化していき定まっていない。そのため、本稿では強いて用語を統一することはせず、その時点で使用されていた語を用いて論じた。
15）中村星湖「空想と反響」（『大阪朝日新聞』一九二五年七月五日）
16）初期の農民文学運動の特徴及び中村星湖の農民劇理論とその問題点については、中村星湖が『農民』創刊号に発表し、上田久七らによる神奈川県「溝ノ口青年演劇部」によっても上演された戯曲「明月」（『農民』一九二七年一〇月）について、拙稿「農民文芸運動における農民劇と「教化」―中村星湖の戯曲「明月」をめぐって―」（『語文』一〇六輯・一〇七輯合併号、二〇一七年三月）で考察した。
17）中村星湖の農民劇理論におけるアイルランド文学の役割と嫩葉会との関係については、拙稿「農民を演じ（させ）る ―日本における農民演劇運動とアイルランド劇―」（『文学　海を渡る　〈越境と変容〉の新展開』三弥井書店、二〇一六年所収）において考察した。嫩葉会に関しては、井上佳江「農民演劇集団「嫩葉会」と安元知之」（『演劇学』二五号、一九八四年）、樋口泰範「農村演劇の先駆「嫩葉会」のこと」

(『悲劇喜劇』五七巻九号、二〇〇四年九月)、畑中小百合「農村演劇の誕生――1920年代の農民文学運動とのかかわりから」(『大阪大学日本学報』二五号、二〇〇六年)参照。

18) 「第五回試演会――十月七日――」『ワカバ会年鑑　大正十二年』(私家版、一九二三年)

19) 中村星湖「北海道の文学(上)」「同(下)」(『北海タイムス』一九三二年八月三〇日、三一日)

20) 飯塚友一郎『農村と演劇―農村演劇の歴史的展望と新構想への示唆』(全国農業会家の光協会刊行、一九四八年)

21) 伊藤松雄『農山漁村商工青年　しろうと芝居　扱ひ方と台本集』(東華書房、一九四二年)。伊藤の活動については、飯塚友一郎も前掲『農村と演劇』において、「以前からドイツの方言劇場や、アイルランドの郷土劇場のことを思ひつゝ、郷土戯曲集などを出してゐた」とドイツおよびアイルランドの演劇を参考にした事例として紹介している。

22) 有馬頼寧「農村理解の道は文学以外になし」(『日本読書新聞』一九三八年一一月一五日)

23) 「本会が結成されるまでの経過報告」(『農民文学懇話会会報』第一号、一九三八年一二月二〇日)

24) 有馬頼寧「農民文学懇話会の発会に臨んで」(『農民文学懇話会会報』第一号、一九三八年一二月二〇日)。同会報の編輯兼発行人は丸山義二。文の末尾に「発会式席上に於ける祝辞の大意」とあり、農民文学懇話会会員の島木健作の言葉は同文に引用されている。

25) 『農民文学懇話会会報』第一号(一九三八年一二月二〇日)

26) 佐々木宵吉「新なる文学動員」(『山梨日日新聞』、一面、一九三九年三月五日)

27) 畑中小百合「戦時下の農村と演劇――素人演劇と移動演劇」(『演劇学論集』第四七号、二〇〇八年)

28) 例えば、「戦時下における国民生活力の啓培に資し、以て国民演劇の樹立の一助たらしめんことを期」して出版された池谷作太郎編『素人演劇講座』(日本文化中央聯盟、一九四一年)においても、「素人演劇参考図書」として、中村星湖『農民劇場入門』(春陽堂、一九二七年)、飯塚友一郎『農村劇場』(大鐙閣、一九二七年)、上田久七『村落劇場』(学而書院、一九三四年)等が挙げられている。

29) 中村星湖「イエーツは死せず(上)　山梨文芸会発会祝辞」(『山梨日日新聞』一九三九年三月一九日)

30) 中村星湖「イエーツは死せず(下)　山梨文芸会発会祝辞」(『山梨日日新聞』一九三九年三月二六日)

31) 中村星湖「無題」(『人生創造』一六号、一九三九年五月、四四頁)。タイトルは無

く、「ウイリアム・バトラー・イエーツが今年一月死んだ」から始まる。

32）放送要旨は中村星湖「農村演劇に就て（一）」「同（二）」（『山梨日日新聞』一九四一年一月八日、九日）として掲載された。

33）宮原誠一「農村演劇運動の政治性」『文化政策論考』（新経済社、一九四三年）。

34）宮原誠一、前掲論。

35）中村星湖「巻頭言　農民劇に就いて」（『五湖文化』農民劇特集号、一九四一年五月一五日）

36）前掲　有馬頼寧「農村理解の道は文学以外になし」

37）「新体制準備会ニ於ケル近衛内閣総理大臣声明」（『公文雑纂・昭和十五年・内閣一・巻一』、国立公文書館、一九四〇年八月二八日発表）

38）同上。

39）同上。

40）小川史「戦時下における素人演劇運動の研究――自発性をめぐる総動員体制のジレンマ――」（『早稲田教育評論』第一八巻第一号、二〇〇四年三月）

41）山宮允「イェイツの訃に接して」（『帝国文学』一九三九年二月）

42）矢野峰人「イエイツと日本」（『文藝春秋』一九三九年三月）

43）矢野峰人、前掲論。

44）伊藤道郎「イエーツと「お能」」『アメリカ』（羽田書店、一九四〇年）

45）*Certain Noble Plays of Japan : From the Manuscripts of Ernest Fenollosa, Chosen and Finished by Ezra Pound.* With an introduction by William Butler Yeats (Churchtown, Dundrum : Cuala Press, 1916).

46）平田禿木「イエーツと日本古典」（『禿木随筆』改造社、一九三九年）。末尾に「（昭和十四年三月）」の日付有。

47）平田禿木、前掲論。

48）外務省情報部「英独決戦と愛蘭島の情勢」（内閣情報局編『週報』一九四〇年七月四日号（一九七号）、一九四〇年七月、後に内閣情報局編『対戦外交読本三　伊参戦より三国条約成立』博文館、一九四〇年）

49）斎藤栄三郎『英国の世界侵略史』（大東出版社、一九四〇年）

50）菊池寛「話の屑籠」（『文藝春秋』一九四二年七月、『英語青年』一九四二年一一月一五日にも「菊池寛氏の英文学観」として収録）

51）山本修二もまた、「愛蘭国民演劇」（『演劇論５　演劇運動』河出書房、一九四三年）において、「芸術上の主張から言つて、逆にマアティンとムアとは国際主義者であり、イエイツとグレゴリ夫人が国民主義者であつたとはいへ、この四頭目は排英主義といふ唯一点に於いて一致してゐた」と述べ、アイルランド文学に見られる共通の特徴を「排英主義」であると述べており、戦時下におけるアイルランド文学受容の特色として見逃せない点である。

52）勝田孝興『愛蘭文学史』（生活社、一九四三年八月）

53）吉田則昭『戦時統制とジャーナリズム　1940年代メディア史』（昭和堂、二〇一〇年）、蔡星慧『出版産業の変遷と書籍出版流通　日本の書籍出版産業の構造的特質』（メディアパル、二〇一二年）、柴野京子『書棚と平台　出版流通というメディア』（弘文堂、二〇〇九年）、日比嘉高「統制経済と書物流通――帝国の国策書籍配給会社」（『名古屋大学人文学研究論集』第三号、二〇二〇年）参照。

［付記］

本稿は、二〇一七年一一月一八日に開催された日本イェイツ協会第五三回大会シンポジウム「イェイツ再読――〈世界文学〉として（２）」における研究発表「戦間・戦時期の日本におけるイェイツ表象」（『イェイツ研究』四九号、二〇一八年六月に発表要旨掲載）をもとに、追加調査を行ったものである。貴重なコメントを下さった方々にお礼を述べたい。また、JSPS科研費（18K00314）の研究成果の一部である。

（文学研究科准教授）

SUMMARY

The Reception of Irish Literature and Nationalism in Japan Before and During World War II:

The Peasant Literary Movement and the Transformation of W. B. Yeats as a Symbol

Akiyo Suzuki

Keywords: Nationalism, Pacific War, national policy, translation, propaganda

The Irish theatrical movement was imported as a forerunner to the Japanese regional theatrical movement in the 1920s. "Noumin" ("Peasants"), which was first published in 1927 to tout the necessity of self-expression by local peasants, published a reconsideration of the Irish drama movement, symbolized by literary personalities such as Yeats, within the context of peasant literature and peasant drama. In 1939, as the construction of the wartime regime advanced, the Peasant Literature Discussion Society was established under the leadership of the Minister of Agriculture, Yoriyasu Arima. Under the general mobilisation system, the peasant literary movement was linked to national policy and developed as an amateur theatrical movement under the Civilian Entertainment Policy. Scholars of peasant literature promoted the establishment of local literary associations and local theatres to educate the populace as 'citizens' through 'wholesome' literature and plays in line with the national policy while retaining the movement's original purpose of providing the masses the chance to express themselves. In addition to being viewed as guides for local dramatic movements, the symbols of Irish literature and Yeats were incorporated into the narrative regarding the wartime role of literature constructed on the transformation of the public into proper citizens under general mobilisation. This article clarifies how the symbols of Irish literature and Yeats were circulated, crafted, and utilised in Japan during its general wartime mobilisation, and established their roots in regional theatrical movements.